

中国民家研究ノート

時野谷 茂

平成16年11月30日受付

【要旨】 中華人民共和国には世界の人口58億の4分の1弱に当たる12億の人々が住み、56民族から構成されている。また国土も広く北の寒冷地から南の多雨亜熱帯気候まで気候も変化に富む上に、海岸地帯から標高5000メートルを越すチベット高地まで地形的にも変化に富んでいる。このような状況下、気候の違い、容易に手に入る材料の違い、生業および生活習慣の違い等からその住宅も実にバラエティーに富んでいる。

このように多種多様なものが存在する中で私はこの数年いくつかの中国の民家を見る機会をえた。本稿の目的はその際に行った採寸並びにスケッチを基に図面を作成することと、その種の民家に関連した特徴についてまとめ、中国民家建築理解の一助とすることにある。研究を進めるに当たっては『中国民居研究』を翻訳し中国の民家を理解することを軸に作業を進め、採取してきたデータの理解に努めた。具体的には広西チワン族自治区の桂林から北方に80km程の所にある和平の瑤族の民家、四川省汾川県の桃坪羌寨、同じく四川省茂県の黒虎羌寨の民家を対象として作業をすすめた。結果として本稿掲載の図面を作成したほか、瑤族の民家が基本的には穿斗架と呼ばれる構想方式に分類されるが細目的に見ていくと瓜柱や枋の用い方は減枋跑馬瓜の形式であり楼層五柱十七挂一步挑とすることができ1階部分の形式から半辺楼という呼び方も付加される。また屋根の形からは懸山頂という分類も可能であることが判明した他、それぞれの基本形からはいくらか逸脱したものであることも判明した。また梁柱平檁式构架形式に属する桃坪羌寨、同じく四川省茂県の黒虎羌寨の民家もその原型と比べると時代の変化に従った形態上の変化、素材上の変化が起きていることが判明した。

本稿中の人口数等統計的な数字は『中国少数民族事典』から引用した2000年のものである。また用語の表記に当たっては初出の時に中国語の発音記号であるピンインを付した。また主要なものを以下に記す。揺(yao2)、羌(qian1)、土掌(tu3zhang3)：民族名、桃坪(tao2ping2)、黒虎(hei1hu3)：地名、寨(zhai4)：行政の最小単位、碉房(diao1fang2)：石積みのトーチカ風家屋、房(fang2)：部屋や家屋の意、土坯(tu3huai4)：日干し煉瓦、枋(fang1)：木造建物の構造材で横方向に用いる角材、檁(lin3)：辞書によると桁と訳されるが、内容を見ると母屋材的でもある。

はじめに

中華人民共和国には世界の人口58億の4分の1弱に当たる12億の人々が住む。そしてその人々は数多くの民族で構成されている。現在中国政府が認めているものだけでも56民族あり、うち漢民族が92パーセント10億人を占め、残り8パーセント1億600万人に55民族が入る。この人々を総称して中国少数民族と呼ぶ。かつては中国全土を支配した蒙古族は581万3,947人で第8位、清朝を築いた満州族も1,068万2,262人で第2位である。現在少数民族の中で一番多いのがチワン族の1,617万8,811人である。また中国は国土も広く面積は日本の約25倍強で北の寒冷地から南の多雨亜熱帯気候まで気候も変化に富む上に、海岸地帯から標高5000mを超すチベット高地まで地形的にも変化に富んでいる。このような状況下、気候の違い、容易に手に入る材料の違い、生業および生活習慣の違い等からその住宅も実にバラエティーに富んでいる。その多様性とそれを学問的に分類整理することの困難さについて『中国民居研究』を著した中国建築設計研究院建築歴史研究所の孫大章氏はその本の中で次の様に述べている。かなり長くなるが、中国の民家の事情を的確に表すものであり翻訳引用してみる。

「現在民家の分類法の研究はまだその緒についたところである、例えば建国初期に梁思成先生が『中国建築史』の編纂を試みた時は、民家を4種類に分けて、それによって違いを示した。それから、劉敦楨先生はまた平面の形によって円形、横長の長方形、縦長の長方形、かね尺の形、三合院、四合院、三合院と四合院の混合体および環状と山崖の洞穴式住居式の住宅など9種類に分けた。20世紀の80年代から、中国建築産業出版社は全国の各部門を組織して地区によってそれぞれ中国の民家の特集を編纂した。それは行政地区に倣って区別した。すでに出版されているのは浙江の民家、吉林の民家、雲南の民家、福建の民家、広東の民家、蘇州の民家、湖南の西の民家、新疆の民家、陝西の民家、雲南の民家の続編など10冊。民家の特色による区別もたくさんあって、例えば江蘇美術出版社出版の「老房子叢書」から選抜き推薦するならば福建の民家、山西の民家、安徽の南の徽派の民家、江南の水郷の民家、トン族の木楼（木造複層家屋）、土家吊脚楼（土家族の吊柱の複層家屋）、開平のトーチカ風複層家屋などの民家となる。構造形式あるいは基本的なところで構造形式によって分類した例はたくさんある。劉致平先生が『中国居住建築略史』の中で清朝の民家に対して分類した穴居、干欄、宮室式建築（つまり庭式の邸宅）、碉房、阿以旺の住宅、パオ、井干式などの7種類もそのようなものである。陳從周等先生の編纂した『中国の民家』の中では、空間の形式と用材の特徴によって分類し四合院、徽派の民家、江南の水郷の民家、土楼（土を用いた複層家屋）、福建広東の帰国華僑やその家族が多い地区の民家、台湾の民家、三坊一照壁と一顆印 (yilzhao2bi2)、吊脚楼、干欄式民家、石組民家、土坯の陸屋根の民家、山崖の洞穴式住居、毡包和暖居 (zhan1baolhe2nuan3ju1 フェルト製のかまくら構造の家) の13種が示された。近年陸元の鼎先生は全面的に人文の背景と地区の自然環境を考慮して創造総合分類法を用いて、塬で囲った庭付き住宅

式、山崖の洞穴式住居、山地の穴開け式、客家の防御式、井干式、干欄式、遊牧民の移動式、石段式の碉房、陸屋根式高台などの9種類に分けた。汪之力先生が主幹編集した『中国伝統民家建築』の中では、各地の各民族の地方の特色を考慮して民家を22種類に分けた。

概括的に言って、民族、社会、地域、経済、技術の背景的条件は民家の形と構造の形成に対して積極的な影響を及ぼしたことがあって、そのため上述の条件から民家の分類には全て一定の道理があることが伺われる。しかし民家の形成する条件は複雑で、ひとつの大きな山は住民の交流を遮り、まるっきり違った風格の民家を形成させ、逆に、1本の大川はとても広い地区の文化をつなぎ、民家の風格に互に通じ合う類似したものを形成させることがある、だから通常民家の形と構造を分類する際に思うことは、「山の為に隔てられ、水の為に合和せられる」である。陝西韓城の民家は山西の民家の影響を受けている、韓城の東へ向かって行けば、禹の入り口を過ぎて、河津、稷山、曲沃、そして晋中晋の南に連結し、南に向かって行けば大荔、渭河に行くことができ最後は西安に到る、そのため山西の商人がここにどっと集まって定住した如くである。また陝西漢中安康のように漢水の便があるため、湖北の商業の付き合いが頻繁になり、長江の貨物船はずっと安康に到着することができた、そのため現地の民家は湖北の影響を大変大きく受けている。しかし例外もあって、例えば安徽の南の徽州地区と江西の北の婺源地区はそれぞれ新安江水系と安江水系に分かれて属し、中間を白際山の山脈が隔てる、しかし人文的原因で両地の民家は同一の形と構造に属する。更に民族の間は経済、地域、歴史の発展と風俗習慣の不一致のため、双方間には対立、封鎖的心理状態が存在していたが、同時にまた相互の疎通、溶け合うような文化現象が存在している。現在でもよくみられる民家の中で多く交じり混じる形態は、例えば1種の民家の形式は多くの民族に受け入れられ、皆に歓迎された家になる。干欄式の建物は広範な地域に及ぶ、董僕、タイ族、トン、苗、景頗、徳昂などの民族が共用するところである。雲南紅河の地区の土掌房は彝族、漢族、タイ族、ハニ族が共に採用する民家の形式になっている。更に北方の四合院の中の縦長の狭い庭の形と構造は山西、陝西、内蒙の南部のあちらこちらに見られる。またもし同一民族が歴史の変遷の関係で、分かれて別の地区に住む場合、また異なった民家の形式を選択して使用する。四川涼山彝族と雲南昆明彝族の民家の形式は風格がそれぞれ異なって、隔たりはすこぶる大きい。タイ族は各地に分散して居住しているため民家の形式も異なっている。西双版纳の水タイ族は竹製の家に居住する；元江、紅河の一带の花腰タイ族は土掌房に居住する；徳宏、潞西の一带の旱タイ族は平屋の漢式の四合院に居住して、各民族間の民家の建物技術と芸術の交流の影響をさらに加えて、時代の風格の変化と蓄積は、更に民家の建物の特徴を複雑化させる。(後略)

このように多種多様なものが存在する中で私はこの数年いくつかの中国の民家を見る機会をえた。本稿の目的はその際に行った採寸並びにスケッチを基に図面を作成することと、その種の民家に関連した特徴についてまとめ、中国民家建築理解の一助とすることにある。

1. 広西チワン族自治区瑶族の民家

① 背景

瑶族は広西チワン族自治区、湖南省、雲南省、広東省、貴州省など広い地域に分布している民族でその数は263万7421人である。この内広西チワン族自治区には67%が住んでいる。従来は山間部の比較的海抜の高い地域で狩猟や焼き畑農業を営できたため、1カ所で多くの人口を養えず、集落は小規模のものが多くとされている。現在は棚田等での農業が可能な高さに降りてきており、水稻、トウモロコシ、サツマイモなどを栽培し、副業的には食用油用のアウラギリ、染料のアイなどの換金作物も栽培している。中国政府は定住を促進するためにすぐれた農業技術を持つトン族やブイ族などの家族を集落内に住まわせ農業や集落運営を指導させたことから瑶族の集落には他の民族が数戸同居していることがあるという。私たちは龍脊梯田との名前が付くほど広大で美しい棚田が広がっていることでも有名な和平で瑶族の民家を見せて頂いた。

② 瑶族の民家の空間構成

上記のような山岳地帯に住む瑶族の民家は傾斜地にたてられることが多いこともあっていわゆる高床式となっている。このような形式を干欄式（架構）という。1階部分の柱の長さを調節して地形に適合させるのである。

一般に、1番下の階は、木の柵で囲んで、鳥獣の小屋、副業と雑務に使うといわれており、見学した家でも牛や豚が飼育されていた。上階は居室で、1番上の階は摺廊（gellou²：屋根裏部屋）となる。1階の手前側に階段があり2階へと上がるがそこは2階の外廊下であり、玄関ポーチの役割を果たしている。玄関の扉を開けると家屋の中央の部屋となっており、全家族の日常生活の活動の空間である。ここで、煮物を食し、お茶を飲み、接客と全てを行うそうだ。したがって奥には囲炉裏もある。また収穫物を広げて乾燥させたりもする。この部屋の中央部分は小屋裏までの吹き抜けとなっているが、左右には小屋裏部屋が設けられていて個室や物置として使用されている。そこには中央の部屋に設けられた梯子で上がる。子供部屋は2階部分の南側に左右に分かれて配置され



写真1-1：集落外観



写真1-2：民家内部居間兼食堂（左）玄関前（右）

ているがかなり小さい。中央の部屋はパブリックな空間と認知されているらしく私たちにも自由に見学させてくれたが、個室はそれぞれに鍵がかかっていることが多く、見学することは難しかった。

③ 建物の素材と構造上の特色

素材としては木と瓦である。木は柱梁の構造材としてばかりでなく床、壁全てに用いられている。但し屋根面は除く。柱は丸太材を用い間口方向および奥行き方向とも等間隔（250cm前後）で立つ、その柱を枋と呼ばれる角材で日本家屋の貫材のように貫いて架構を成す。基本的には間口方向奥行き方向とも同じである。床については奥行き方向の枋の上に太めの丸太材を80cm前後の間隔で並べ厚手の板を敷いて構成する。小屋組は柱の頂上に直接檼と呼ばれる部材を置く。柱と柱の間には日本家屋の小屋束に当たる瓜柱を立て檼を支える。垂木は無くその檼に野地板を掛け渡すように張るが、野地板は幅の狭いものであり間隔は板瓦を支えることのできるぎりぎりの粗さである。天井は無く野地板と板瓦が屋内から直接見える。壁はパネルというか建具状になっているが、先にパネルを制作して取り付けというものではなく、柱等にわく材を取り付け、その後に板材を張ったものである。このような構造は孫大章氏の分類によると穿斗架(chuan1dou4jia4)と呼ばれる。これは江蘇・浙江福建江西湖南川の貴州等の木材資源の豊かな地域で広く用いられているもので、柱、穿枋の組合せ方の違いから (a)柱柱落地(zhu4zhu4luo4di4)、(b)满枋满瓜(man3fang1man3gual)、(c)满枋跑马瓜(man3fang1pao3ma3gual)、(d)减枋跑马瓜(jian3fang1pao3ma3gual)の4種類に分けられている。(a)柱柱落地は各層の穿枋は各柱を貫く。これを满枋满柱(man3fang1man3zhu4)という。(b)满枋满瓜は柱を間引いてそこに瓜柱を用いる。しかし各瓜柱の柱脚は全て第一層の穿枋の上に達し、穿枋は各瓜柱をすべて貫く。(c)满枋跑马瓜は瓜柱の長さは同一（あるいはほぼ同一でこれを跑马瓜と呼ぶ）で、すべての瓜柱は少なくとも3本の枋と交わる。各枋は前後の屋根面まで通り、一部の柱間を省くと言わない。(d)减枋跑马瓜は瓜柱の長さは满枋跑马瓜の時と同じであるが、下層の枋が一部の柱間で省かれる(図1-1)。第1種の形と構造は経座的理由から現在は使用されることは少ないという。

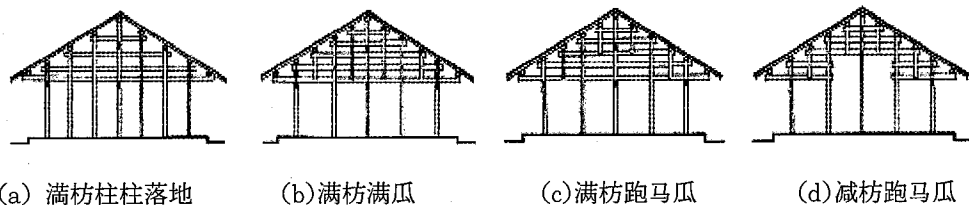


図1-1：穿斗架の柱と穿枋の組み合わせ形式（出典：『中国民居研究』）

今回私の採取してきたものは(d)の减枋跑马瓜形式に属するものであるが2階建てである。次にこの形式の変化形についてみていく。上記の(a)～(d)の形式名にも見るように中国の建物を見ていくとその表現形式が豊かであり、それが端的に形や形式を表現しているのに驚く。図1-2は减枋

跑马瓜の变化形を示すものであるが、ここでは「楼」という言葉でそれが2階建て以上であることを示している。また「五柱八挂両歩挑」を例にとると、五柱は柱の数で奥行き方向の大きさを、八挂で瓜柱の数、「挑」の字で張り出し部分の有無を、そしてその大きさを「歩」の前の数字で表わしている。

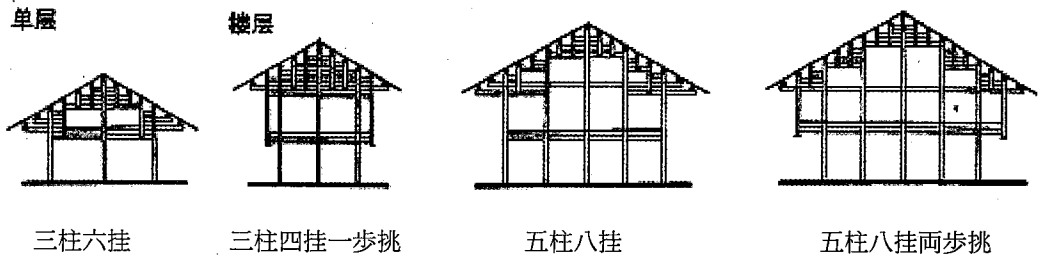


図1-2：穿斗架の柱と穿の組み合わせ形式（出典：『中国民居研究』）

これに倣えば私の採取してきたものは「楼层五柱十七挂一步挑」となる。ここで「歩」は桁材間の水平距離を表す。普通の歩距(標の間隔)は中国尺で1.5-1.8の間、すなわち48-58cm、あるいは2木尺つまり60cmで、最大で2.5木尺すなわち75cmを上回ってはならないとされている。だから奥行き

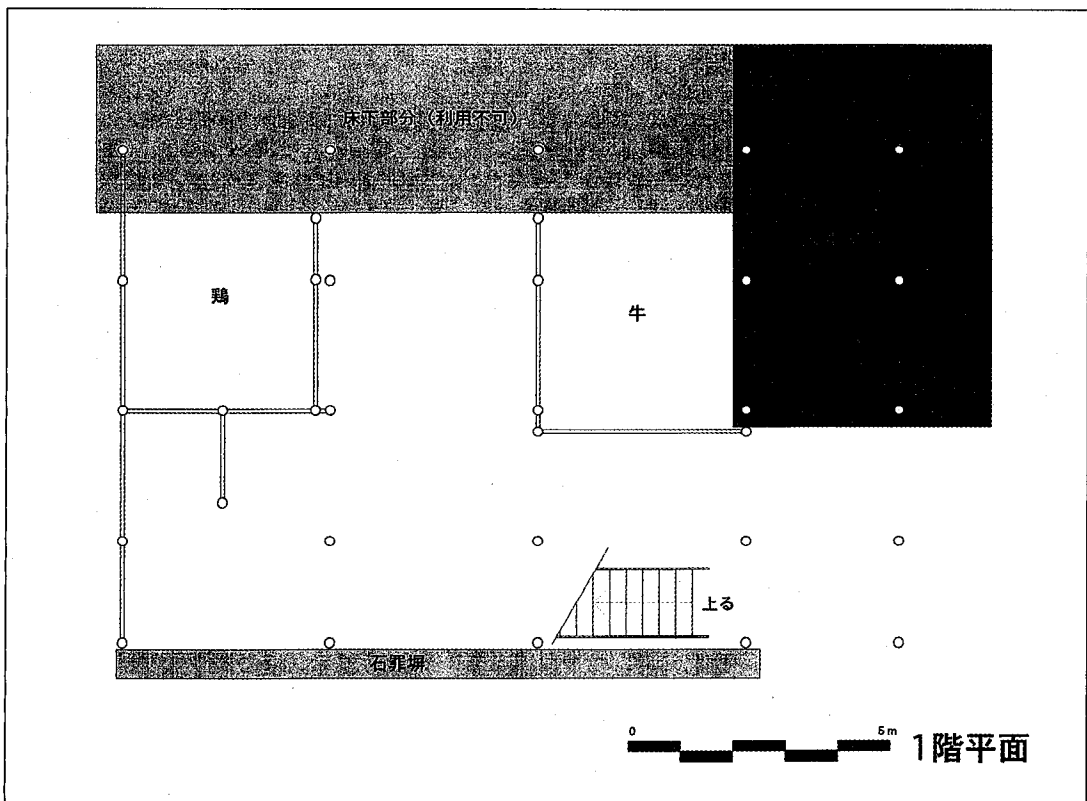


図1-3：瑶族民家1階平面図（調査：狩野勝重、時野谷茂 作図：時野谷茂）

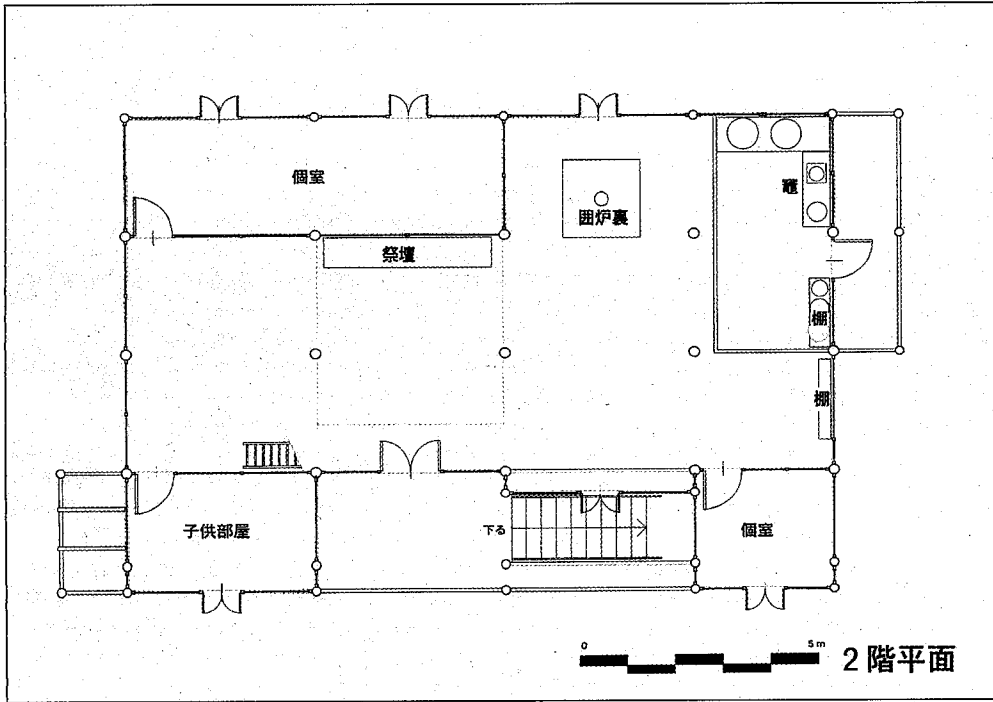


図1-4：瑶族民家2階平面図（調査：狩野勝重、時野谷茂 作図：時野谷茂）

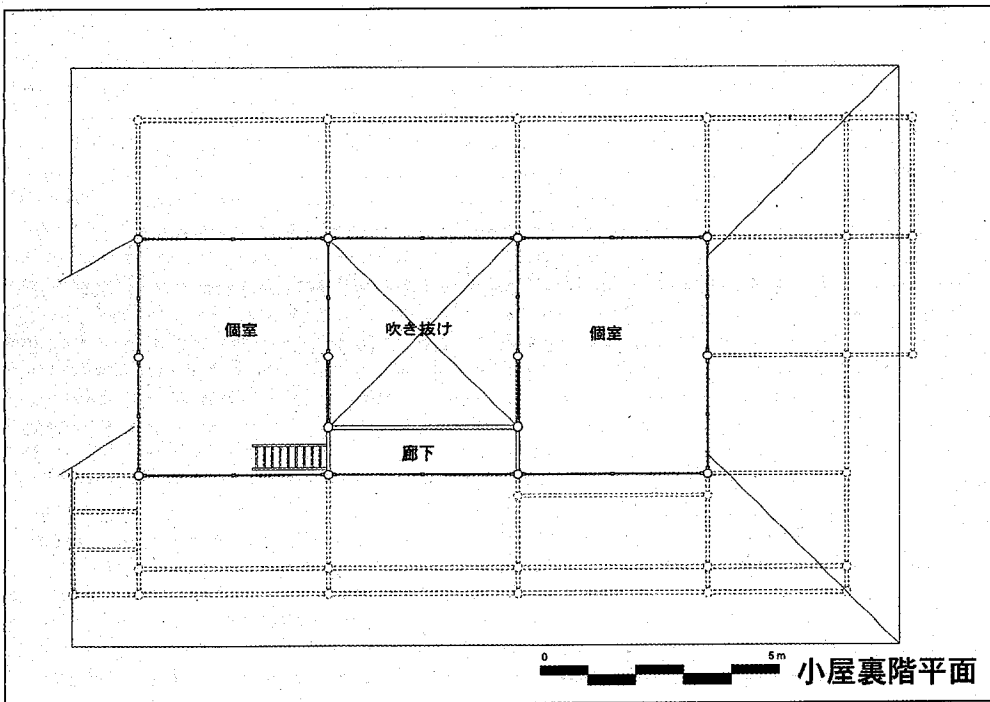


図1-5：瑶族民家小屋裏階平面図（調査：狩野勝重、時野谷茂 作図：時野谷茂）

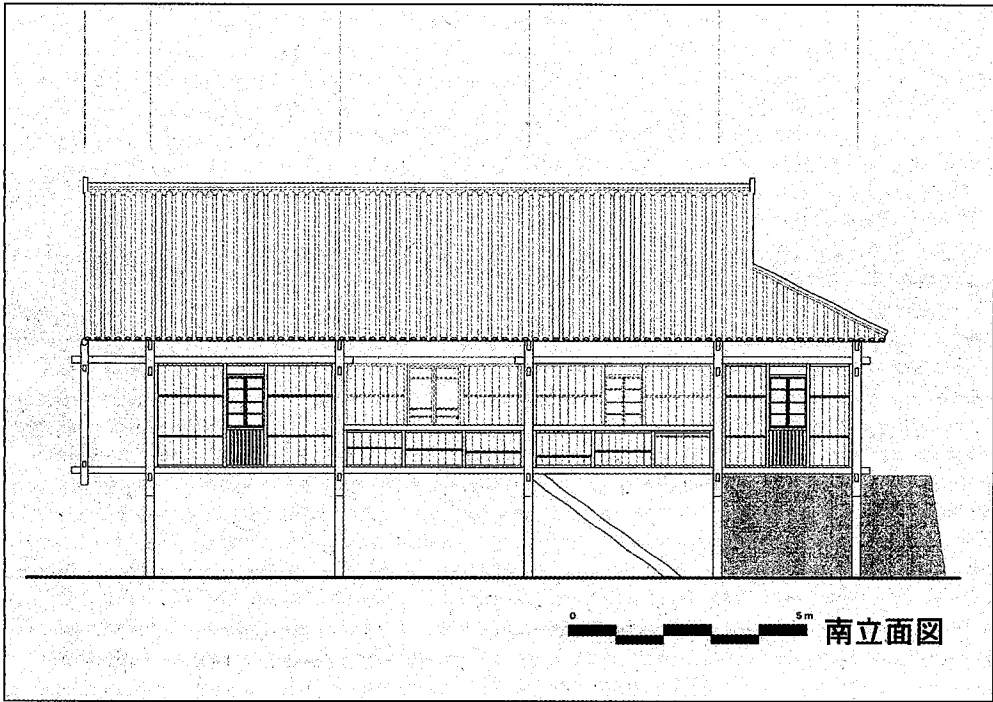


图1-6：瑶族民家南立面图（調査：狩野勝重、時野谷茂 作図：時野谷茂）

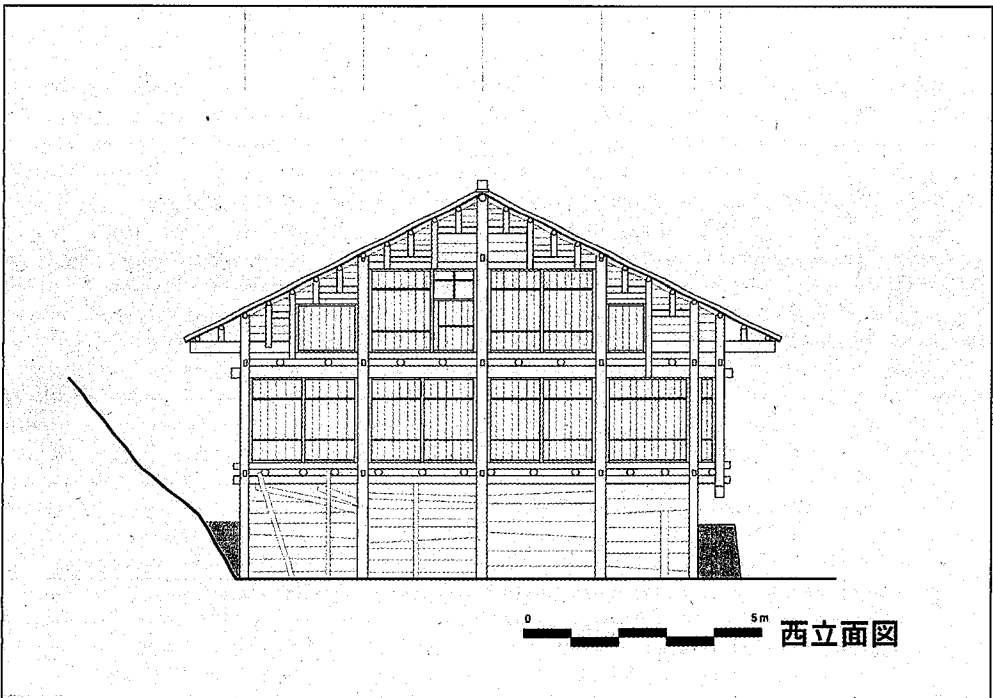


图1-7：瑶族民家西立面图（調査：狩野勝重、時野谷茂 作図：時野谷茂）

の大きさは柱と瓜柱の使用の多少によって決定する。『中国民居研究』には「柱間に1本あるいは2、3本の瓜柱を使うが、更に多く使うことはできない。」との記述があるがこの例はそれを越えており更なる変種と言うところであろうか。この瓜柱の呼称も地域によって異なるようで、湖南の西ミ瑤族の人は「挂 (gua4)」と称するが、トゥチャ族の人はそれを「棋 (qi2)」と称する。普通の中流の人の民家の排架の多くは三柱四棋、三柱六棋、五柱八棋、つまり奥行きは360—720cmであるが、大富豪の家は七柱十四棋、奥行きは10m以上に達するものもあるという(図1-2)。

先にも記したがこのような高床式のことを干欄式(架構)というが、落地穿斗架方式という呼び名もある。これには1階部分が居住空間ではなく空いている状況を表しているが、敷地の傾斜等で1階の一部が十分な高さをとれない場合は「半边楼」という呼び方で区別される。また屋根の形にも呼称があり、いわゆる日本の切妻屋根で妻面にも屋根がのびているものは「懸山頂 (xuan2 sha n1 ding3)」と名付けられている。

2. 四川省羌族の民家

① 桃秤羌寨の楊宅の背景

羌族は四川省の首都成都の北方、揚子江の支流である岷江沿いに多く居住する総人口30万6072人の民族である。主な産業は農業でトウモロコシやジャガイモ、チンクームギ、ソバなどを急斜面を耕して栽培している他、ブタやヤギなどの家畜も飼育している。昔からアミガサユリやウドなど漢方薬の原料を採取して現金収入を得ていたが、近年は道路工事や伐採の出稼ぎに多く依存している。彼らが居住する地域は雨は比較的少なく、大きな山が峰を連ねている。岩勝ちの山肌には大きな樹木は少ない。代わりに河原には住宅建設に適した石が沢山ある。私たちの訪れた桃秤羌寨は成都の北100km余の汶川で岷江に注ぐ杂谷脑河に沿って約15km上ったところにある。この辺りではリンゴやトマトといった換金作物の栽培も行われている。桃秤羌寨は既に観光開発がなされており、集落に入るには入場料が必要である。専用のガイドが付き集落内を案内してくれる。この集落の特徴は全ての家がつながっている点にある。つながっているというのは家の構造壁を隣同士で共有しあってそれが集落全体に広がっているのである。実に複雑でこれを図面にするには相当の労力が必要であろうなどと思わず考えてしまう。自然発生的に増殖を繰り返していった結果であり、計画的にはなし得ないような形態で大変魅力的である。各家の下には水路も張り巡らされており実に未来的な集合住を思わせるところもある。私たちが見学できたのはそんな旧集落の周囲に1970年代に新たに独立した形で建設された民家である。私たちの担当ガイドとなった楊さんの住まいである。楊さん宅は農業をしている両親と公安官をしているお兄さんそれに観光ガイドをしている楊さん本人の4人家族である。

② 桃坪羌寨の楊宅の空間構成

敷地から見ていくと、敷地は南面に石積みの塀があり、木造の門屋が建っている。東面は隣の建物の壁で北面は斜面が上っており、西面は川が流れているが水面は敷地面よりかなり低いいため、雑木で垣根としている。玄関は建物南面の中央にあるが門との軸線は少しずらしてある。建物は2階建てで石積みの耐力壁に丸太材を渡した構造となっており、屋根は陸屋根でペントハウスを兼ねた木造の上屋もあり屋上も利用されている。1階南半分は西側に南北に2つの個室を取り、残りは居間となっている。居間の西より（建物全体で言うと中央部に位置する）上部は吹き抜けとなっていてその上はトップライトとなっている。しかし屋根面の丸太材は無造作に新しい切断面を見せている。住まい手の話では、ここが保存地区に指定され観光化された時に、古い形態ではトップライトが在ったのだからそうするようにとの指示で近年新たに屋根に穴を開けたということである。2階は吹き抜けを挟んで東西に個室が2つずつありそれを廊下がコの字形に吹き抜けを囲む形で繋いでいる。北半分には食堂と台所が続く。食堂は居間よりも10cm程高く、壁には梁材を抜いた後があり、結果として吹き抜けの天井の高い空間となっている。ここにもトップライトが後付されている。食堂部分の東3分の1は物置となっておりその壁の手前に2階への梯子が掛かっている。台所は更に85cmほど高く、横幅は建物間口の3分の2程で東に寄っている。

仕上げをみると1階床は全ての部屋がモルタル仕上げ、2階床は板張である。壁は耐力壁となっている石積み部分は漆喰仕上げであるが、屋内に面する個室の壁は木造板壁である。天井は基本的には上階の下地がそのまま露出している。

開口部は玄関ドアと食堂から外に出る勝手口が出入り口で残りは窓となる。居間や個室に付く窓は比較的小さいが、西面は別であり、個室、食堂とも大型の窓が付いている。楊さんのお父さんの話では、昔は窓はもっと小さく、日本でいうお城の矢狭間、銃眼のようなものであったという。資料で見ると確かに1階や2階はそのような大きさであり、3階以上で窓らしい大きさとなっていたようである。この集落の古くからの部分が防御を主な目的に作られていたという話からも素直に理



写真2-1：桃坪羌寨全景俯瞰

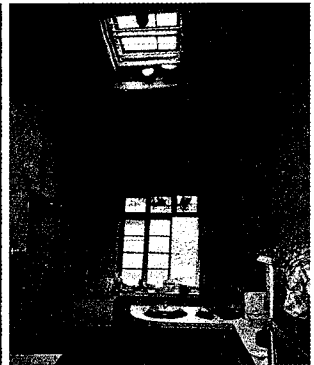
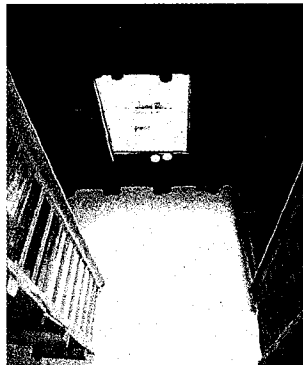


写真2-2：楊宅の居間吹き抜け（左）と台所（右）

解できるところである。

設備としては西端に水道があり小さなタイル貼りの流しと同じくタイル貼りの竈がある。台所の西側の空いた所には屋外に外竈が設けられている。トイレは西側に別棟で建てており、男女別となっている。トイレと外竈の間にはブタ小屋がある。しかしお風呂は無い。

③ 黒虎羌寨の楊宅の背景

私たちの訪れた黒虎羌寨は茂県から岷江沿いに15~16km上りそこから500~600m未舗装の道路を奥に入った所にある。村の中心部までは車で行けるが、今回詳細に見学することのできた楊さん宅はそこから更に急な斜面を小一時間登った傾斜地にあり、村の中心部が眼下に小さく見渡せる場所であった。近くには崩れかけてはいるが石積みの塔があり、その他にも2,3本の塔が視界に入るという伝統的な集落であり、国の保護地区にも指定されている。楊さん宅自体は1995年に新築されたものであるが形式は伝統的なものを踏襲しているという説明であった。ただし屋根はコンクリートが打っており、直径2m程のテレビ用パラボラアンテナが設置されており、この辺は近代化が進んでいた。現在は祖父母と若夫婦に子供が二人の計6人家族で住んでおり、職業は農業である。建物は住宅のほかに豚小屋とトウモロコシの製粉作業小屋があり、何れも壁は石積みである。

④ 黒虎羌寨の楊宅の空間構成

この建物は孫大章氏の分類によれば梁柱平檁式构架ということになるが、先に見た瑶族の干欄式の要素も見られる。それはこの建物が半辺楼で、1階？（日本の建築基準法による解釈では地下階）に鶏を飼育する場を設けている点である。またトイレも同一レベルにあるがそれは住宅の真下ではなく、側面下に位置している。住宅へのアプローチとしては鶏小屋の脇を通り、トイレの前を過ぎて2m弱の石段を登ると住宅の敷地レベルとなる。住宅自体はコの字型をしており、真ん中の凹み部分が玄関アプローチとなっているが、間口の3分の1程の幅があり、奥行きも建物奥行きを半分程あり、かなり広い。ここは上部にアーチ形にテントが張っており、半内部空間化されている。このアプローチの左は個室でこの空間に面してドアがあり、施錠されていた。右手には2階に通じる



写真2-3：遠景（左）外観（右）

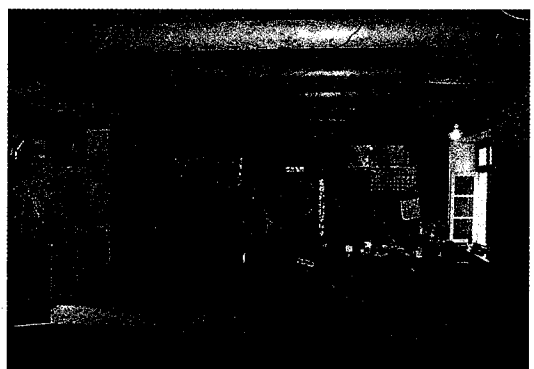


写真2-4：居間兼食堂（左手が玄関）

コンクリート製の階段があり、その奥が台所ということであったが中は見学できなかった。また外壁は1階部分はこのアプローチ部分を含めて全て石積みであるが、2階部分でこのアプローチに面するところは木造の板壁となっている。桃坪では防御の面からもこの形式の壁が用いられ、窓さえも必要最低限の大きさにしていたという話に比べると大きな違いである。石積み壁の位置を改めて見てみると、ここでは防御といった意味は薄れ、純粋に耐力壁として考えられていることがわかる。

正面が玄関ドアで、それを開けると直接広い居間兼食堂である。この左手の壁にはドアがあり、小部屋がある。そこに私たち用のカップやお茶などを取りに入ってしまったが、中の詳細はわからない。居間兼食堂の左奥には食卓と低いサイドボード、右奥には小さなテーブルの上に鍋や食材等が置かれ、壁には道具が掛けられていた。玄関ドア側左手隅にお風呂のようなものがあったがそれはブタ用のもので、ここでもやはりお風呂は無い。これはトン族出身のガイドさんから聞いた話であるがお風呂は人生で3回しか入らない、最初は産湯、次が結婚式の時そして最後は死んだ時ということでした。住宅にお風呂は必要ない様子です。

内部の仕上げは床はモルタル鍍仕上げ、壁は漆喰鍍仕上げ、天井は丸太の床梁が露で、2階の床板が天井を兼ねている。

2階は階段を上がるとこのアプローチに面してコの字型に廊下がある。廊下の手すりは棧組みや模様抜きした板等で構成されており、近代化が進む中でも住まいにおける伝統への思いといったものを感じた。2階の4部屋は全てこの廊下から出入りするが、ドアには全て鍵がかかっていた。外観から判断するに右手手前の部屋は物置と見られる。アプローチ部分にテントが架かり半内部空間化しているからといって、個室が全てここから、つまり屋外から出入りするようになっていることは特異な点である。

⑤ 建物の素材と構造上の特色

桃坪羌寨や黒虎羌寨の建物の素材は石であり、屋根や上階床には木材を使用している。割石を緻密に積み上げた外観はまるでトーチカの様であり、碉房と呼ばれている。このような形式は先の孫大章氏の分類によれば梁柱平檁式构架ということになる。これは羌族だけに特有な民家形態ではなく同地区に住む藏族(チベット族)の民家にも共通するものであり、これに似た形式のバリエーションを『中国民居研究』に見てみる。

屋根の平らな梁柱平檁式构架は、多く乾燥していて雨が少ない地区で用いられる。四川・チベットのチベット族の民家、四川の羌族の民家、新疆のウイグル族の阿以旺の民家、雲南のイ族、ハニ族の土掌房などである。チベット族の碉房(トーチカ風の家)は外観は見たところ重々しい石壁だが、内部は支柱と梁の簡単な木架構で荷重を支えている。その架構方法は木の柱(普通は角柱だ)を使って直接大梁を受け、梁の上に平に檁を並べる。梁と柱は柄で接合し、金具は使わない。ひさしの廊下あるいは室内の柱の上に替木を加えて、大梁と柱を接合し安定性を増す。2階あるいは3

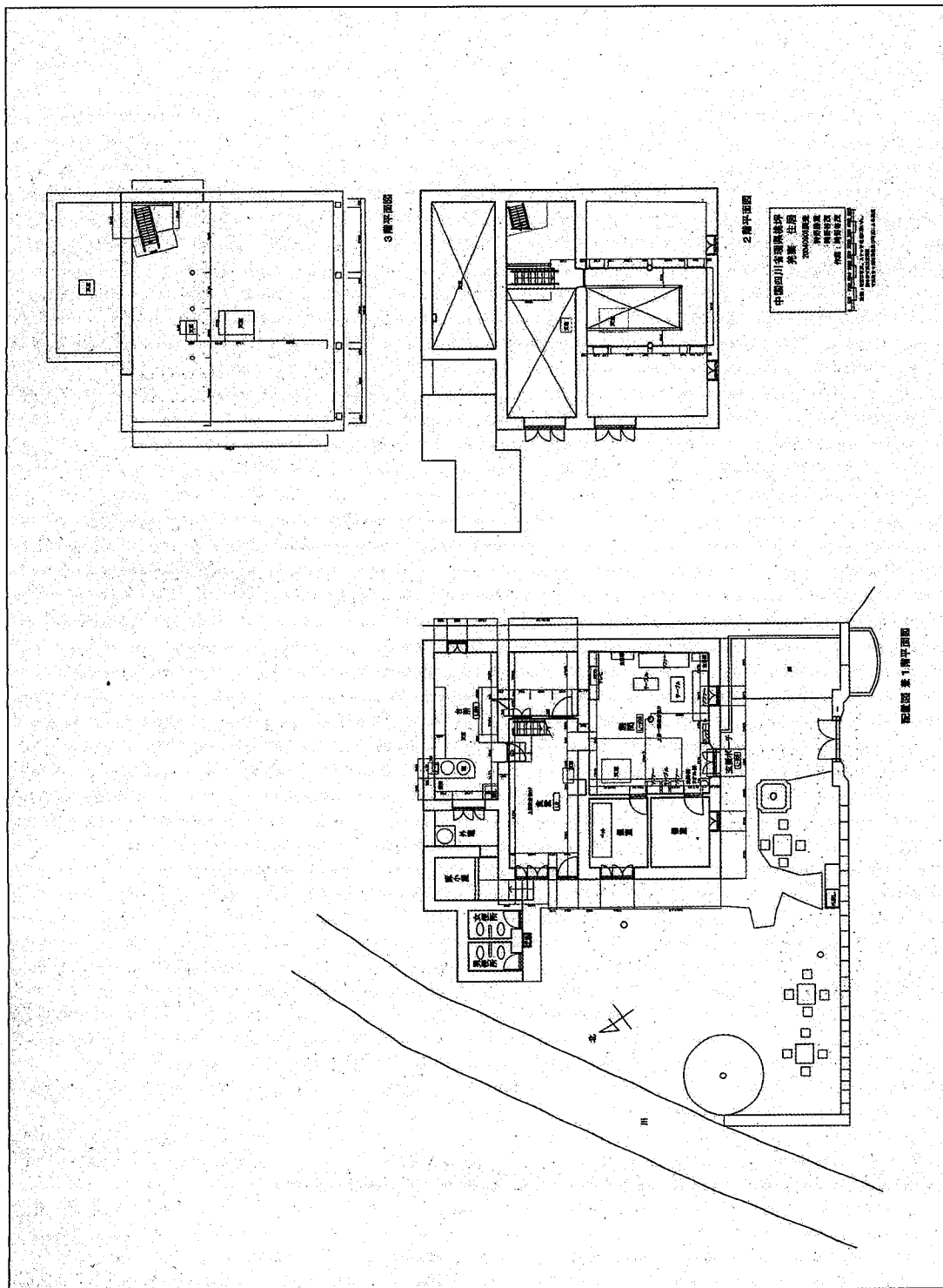


图2-1：桃坪羌寨 楊宅配置図・平面図（調査：狩野勝重、時野谷茂 作図：時野谷茂）

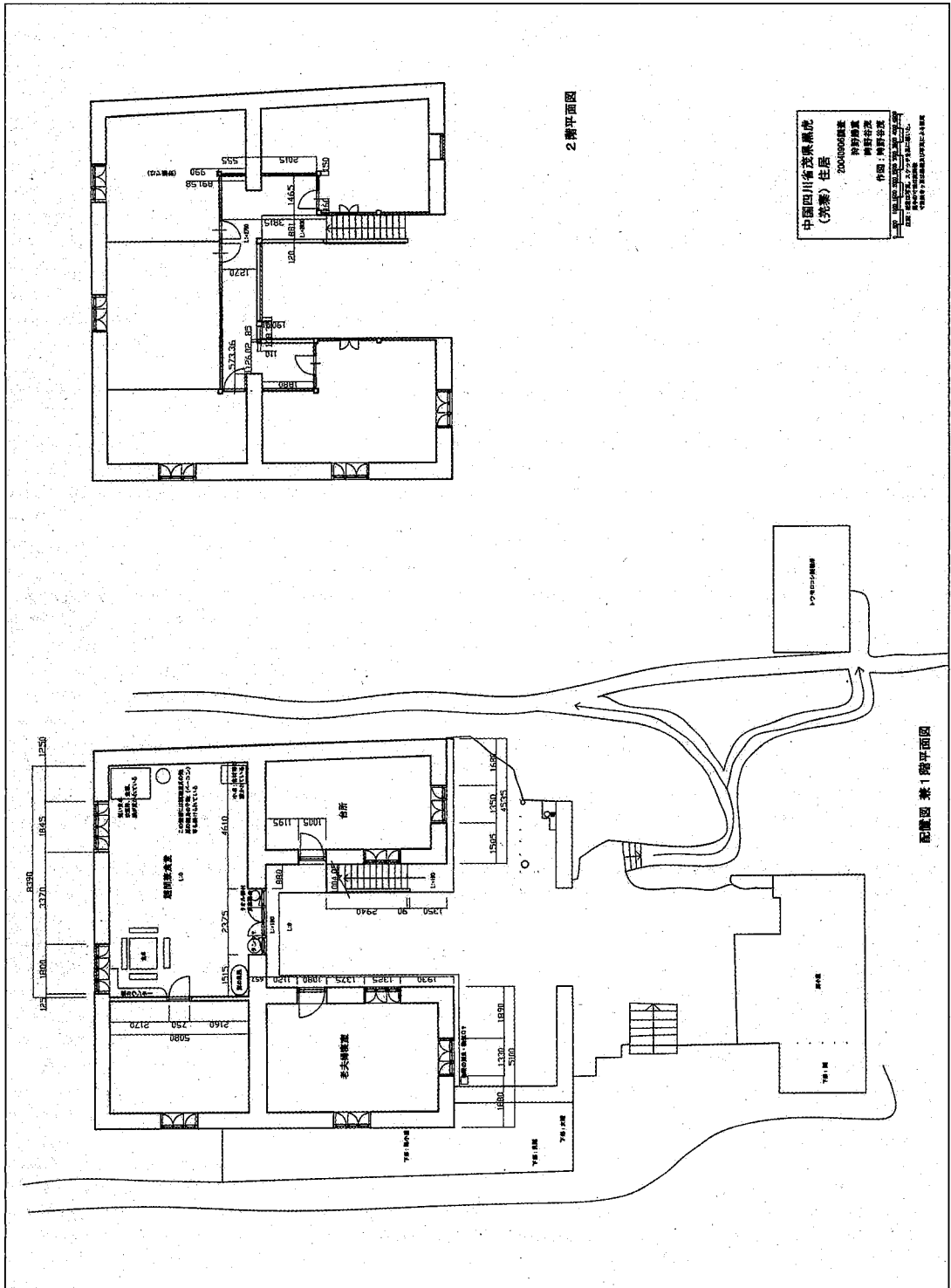


図2-2：黒虎羌寨 楊宅配置図・平面図（調査：狩野勝重、時野谷茂 作図：時野谷茂）

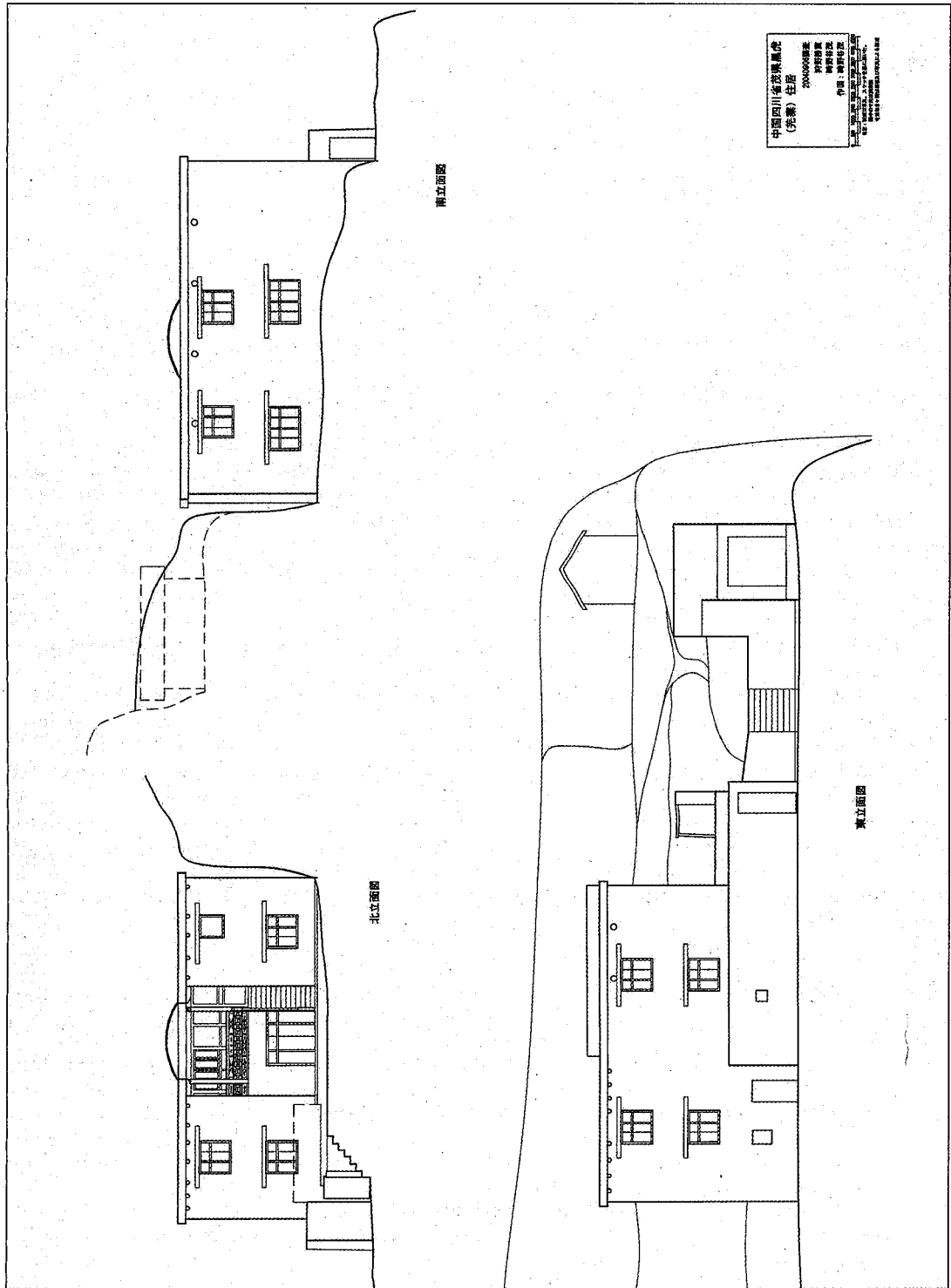


図2-3：黑虎羌寨 楊宅立面図（調査：狩野勝重、時野谷茂 作図：時野谷茂）

階と階を重ねるときは、上下の柱の位置は同じにする。チベット族の習慣では、柱の配置（柱の配置モジュールを中国では柱網と呼ぶ）は間口奥行とも全て2~2.3mだ。一般の大梁は全て外壁と平行で、縦方向に配置し、15cm×20cmの枋木(角材)を採用する、桁材は横方向に配置する、桁の間隔は約20~40cm、直径10cmの丸太桁あるいは8cm×12cmの角桁を使うことが多い。桁の上には木の枝を密に敷き、上に砂土と阿嘎土を敷いて、層を分けて突き固める。外壁に沿った柱や梁を省いて、密に置いた桁材の一端を直接壁の上に架けるかあるいは壁に沿って固定されている枋木の上に架ける地区もある。混合構造である。チベット族の碉房は桁を平らに密に配置してあるが、部材間を枋で接合することは少なく、大部分の部材は接続されていない、より原始的な構造方法である。構造の安定性は厚く重たい屋根の荷重の（一般的な家屋の屋根の葺土厚は30cmに達する）重圧に頼っている。分厚い石で外壁を築くことはまた架構の水平方向の変位を制限して、部材を安定し倒れなくともいる。羌族の民家の架構法とチベット族のそれは同じである。また木架構と壁構造の混合架構方式である。元江、紅河、緑春、元陽一帯で盛んに行われる土掌房（tu3zhang3fang2）もまた平桁式の架構である。柱は3mぐらいまで、平梁の断面は約10cm×20cm、もしスパンを少し大きくするならば、梁下に別に梁枋を加える、木の丸桁の直径は約10cm、桁の間隔は30cmである。上には竹片、イバラの枝、柴や草を敷き、天辺は20cmの厚い粘土で覆う。取り囲んで保護するための外壁は版築壁あるいは土坯壁を使う。外壁が荷重を担う場合は、壁の頂上に臥せ梁を敷設して梁や桁をその上に掛け、それによって圧力を分散する。紅河地区は夏季にひどく暑い、だから外壁の頂上と屋根との間に空隙をつくり、それによって室内の風通しを確保する。同時に土の外壁を保護するために、平らな屋根の四周にはみな出ひさしを廻し、その外観は羌族やチベット族の民家と大して変わらない。

最後に共に旅し多くの助言をくださった日本大学工学部狩野勝重教授と中国語の翻訳文を添削してくださった会津大学陳文西講師に感謝の意を表します。

- 参考文献 孙大章 著 (2004)『中国民居研究』中国建筑工业出版社
 过汉泉 編著 (2004)『古建筑工艺系列丛书 古建筑木工』中国建筑工业出版社
 卢丁、工藤元男 主編 (2003)『中国四川西部 人文历史文化綜合研究』四川大学出版社
 罗哲文 主編 (2002)『中国古代建筑』上海古籍出版社
 李明 主編 (2002)『東方古堡 桃坪羌寨 摄影：杨分健 万渝川』理县旅游局
 田畑久夫、金丸良子、新免康、松岡正子、索文清、C.ダニエルス 著
 (2001)『中国少数民族事典』東京堂出版
 劉敦楨 等編撰 (1996)『中國古代建築史』明文書局印行